

人と関わる意欲を育む小学校外国語活動

— グループ・アプローチの活動を取り入れた指導の工夫 —

佐藤文香¹

小学校外国語活動において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養うには、人と関わる意欲を育むことが大切である。そのためには、児童がコミュニケーションの楽しさを体験し、人と関わる良さを実感する必要があると考えた。本研究では、児童の関心を高める活動場面を設定した上で、グループ・アプローチの活動を取り入れた指導を行い、その効果を検証したところ、児童の人と関わる意欲の向上が確認できた。

はじめに

平成20年3月、小学校学習指導要領が改訂され、小学校外国語活動の目標として「コミュニケーション能力の素地を養う」ことが掲げられた。コミュニケーション能力の素地について、小学校学習指導要領解説外国語活動編（以下、「解説」という。）には、「小学校段階で外国語活動を通して養われる、言語や文化に対する体験的な理解、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度、外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみを指したもの」と示されている。

同解説ではさらに、現代の子どもたちが、自分の感情や思いを表現したり、他者のそれを受け止めたりするための語彙や表現力及び理解力に乏しいことにより、他者とのコミュニケーションが図れないケースが見られることから、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成は必要であると記載されている。

これまでの筆者の実践を振り返ってみると、外国語を通して言語や文化に対する体験的な理解を深めることや、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることに比べて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することは、一層指導の工夫が必要であると感じる。

相手の思いを理解し、自分の思いを伝えることがどんなに困難でも、何とかコミュニケーションを図ろうとする姿勢を児童に身に付けさせるためには、児童がコミュニケーションを図ろうとする場面を設定することに加えて、人と関わることの大切さを理解させ、人と関わろうとする意欲を育むための工夫をすることが必要である。

そこで、本研究では、グループ・アプローチの活動に着目し、「人と関わる意欲を育む」外国語活動の指導について考究することとした。

研究の内容

1 研究テーマについて

(1) グループ・アプローチについて

野島（1999 p.6）によれば、グループ・アプローチとは「個人の心理的治療・教育・成長、個人間のコミュニケーションと対人関係の発展と改善、および組織の開発と変革などを目的として、小集団の機能・過程・ダイナミクス・特性を用いる各種技法の総称」であり、グループ・アプローチの現代的意義として、「他者と親密で深い人間関係を形成することができること」（野島 1999 p.13）が挙げられている。

また、相馬（2006 p.16）によれば、グループ・アプローチは「主に学校教育の現場で、学校の教師等によって行われる活動をいい、子どもの成長発達上の諸問題について支援していく援助サービスの過程」であり、具体的には、構成的グループ・エンカウンター、ソーシャル・スキル・トレーニング、ロールプレイ等が挙げられている。

本研究では、数あるグループ・アプローチの活動の中でも、児童の人と関わる意欲を育むことに適した活動に着目し、工夫を加えた上で小学校外国語活動に取り入れることとした。

(2) グループ・アプローチの効果的要因

野島（1999）は、グループ・アプローチには様々な効果的要因があるとし、受容、支持、愛他性、観察効果、相互作用等を挙げている。これらの中から、受容、支持、愛他性に特に着目することとした。

受容とは他者に温かく受け入れられていると感じること、支持とは他者からいたわり励まされていると感じること、愛他性とは他者を助けることができる喜びを感じることである。これらは人と関わる良さを実感させる上で重要な要因であり、人と関わる意欲を育むことにつながると考えた。

(3) 三つの効果的要因をもつ活動

受容という効果的要因をもつ活動とは、相手の名を呼ぶ、相手の目を見てうなづく等の他者を温かく受け

1 厚木市立毛利台小学校

研究分野（言語活動の充実 外国語活動）

入れる具体的方法を児童が学び、表現するものである。

支持という効果的要因をもつ活動とは、言葉とともにジェスチャーも使って相手を褒め励ましたり、タイミング良く褒め励ましたりする等、他者を褒め励ます具体的方法を児童が学び、表現するものである。

愛他性という効果的要因をもつ活動とは、自分が他者の役に立つことを発見し、他者を助ける喜びを感じることができるものである。他者と協力し他者を助ける活動においては、自分の意見が他者へのヒントとなったり、自分が助けた相手から感謝されたりする等、児童同士で助け合う体験を数多くもつことができる。

これらの活動を小学校外国語活動に取り入れることで、やり取りの中で児童は他者からの良い反応を体験することになる。その結果、児童は人と関わる良さを実感し、人と関わる意欲を育むことができると考えた。

(4) 目指す児童像

上記の活動に取り組みせることで、「人と関わる意欲」を育むことができた児童像を、①人の話を進んで聞きたい②人を褒め励ましたい③人と協力し人を助けたい、と考えることのできる児童と捉えた。

2 研究の方法

児童の人と関わる意欲を育むに当たり、活動場面の設定を工夫し、先の三つの効果的要因をもつグループ・アプローチの活動を取り入れることの有効性を授業で検証することとした。

(1) 検証授業の概要

実施期間 平成22年9月30日～10月19日

対象児童 第6学年4学級(149名)

授業時数 各学級 4時間

単元名 英語ノート2 Lesson④

できることを紹介しよう

- 単元目標
- ・積極的に友達に「できること」を尋ねたり、自分の「できること」や「できないこと」を答えたりする。
 - ・ジェスチャーや表情などを加えて相手の言うことに反応しようとする。
 - ・相手を褒めたり励ましたりすることによって、相手との関わりを深めようとする。
 - ・外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験する。

主な表現 I can ～. Can you ～? Yes, I can. /No, I can't. Really? Great! Almost. 等

(2) 研究の手立て

活動場面の設定、取り入れる活動の検討、グループ構成の工夫、児童の様子を見取るシートの開発を主な手立てとし、授業を構成した。

ア 活動場面の設定

単元における主な表現を扱う上で、児童の関心を高める活動場面を設定し、コミュニケーションの楽しさを

を体験させる。尋ねたり答えたりする必然性がある場面、児童に身近な場面等、児童にとって相手と自然にやり取りしたくなるようなコミュニケーション場面にする。このような場面でのコミュニケーションは、児童にやり取りの楽しさを体験させ、コミュニケーション活動への積極性を喚起させやすい。

具体的には、単元の主な表現canを使い、1・2時間目は相手のできることを尋ね合うインタビュー活動を設定した。3時間目はお手玉グループとけん玉グループに分かれ、どちらかに属して、今できることを伝え合う活動、4時間目はグループの仲間のできることを紹介する番組を作り、発表・鑑賞する活動とした。

イ 取り入れたグループ・アプローチの活動

授業に取り入れた具体的な活動について、その基としたグループ・アプローチの活動及び効果的要因とともに詳しく述べる。

(7) 「ファーストネームゲーム」(受容)

ジャンケンをして勝った方が相手のファーストネームを即座に呼ぶ活動である。「ファーストネームゲーム」(國分 2005 pp.132-133)を基にしたもので、自分の名を親しみを込めて呼ばれると、相手に受け入れられていると感じることができ、短時間で良い関係づくりができるという良さを取り入れた。学級に慣れない頃は、相手の名を知る効果が期待でき、慣れた学級においても、自分のファーストネームを親しみを込めて呼ばれると、改めて自分と相手との関係を見つめるきっかけとなる。母語では呼び捨てとなり良い印象を受けないこともあるが、外国語活動においては、ファーストネームを呼ぶことが親しさの表れであるという異文化理解とともに、お互いの関係づくりに役立つ。

(4) 「『?』と『!』と『😊』」(受容)

隣席の相手とペアで行うインタビュー場面において、Really?/Great!/I see.等の言葉と「?」「!」「😊」の絵カードを使って自分の気持ちを表す活動とした。

「『?』と『!』」(國分 2005 pp.84-85)を基にしたもので、この活動のもつ以下のような良さを取り入れた。絵カードによって、相手の話を積極的に聞いていることや相手のことをもっと知りたいと思っている気持ちを表現しやすくなること、また、相手は絵カードを見て、自分は温かく受け入れられていると感じることができることである。初めて知る外国語の音声やリズムを楽しむうちに、ふだんは気持ちを表すことが苦手な児童も段々と自分の気持ちを表せるようになる。

(5) 「スマイル・アイコンタクト・握手リレー」(受容)

視線を合わせたり笑顔を送ったりする際に、相手のどこに注目したらよいかができるようになる、「スマイルリレー・アイコンタクトリレー・握手リレー」(NPO 星槎教育研究所 2009)を基にし、Good morning. やHello.等の言葉とともに笑顔、視線、握手を後ろの人にリレーで送る活動とした。人と関わる良さを実感させるに

当たって、このようなソーシャル・スキルを身に付けさせることも必要であり、トレーニングされたソーシャル・スキルによって、良好でない仲間関係を改善することができるかとされている。相手の目を見て笑顔で「おはようございます」と言わせる指導は、児童の発達段階からして今更難しい。しかし、言葉を外国語に変えるだけで児童にとっては新しい挨拶の場面となり、「Good morning. は目を見て笑顔で」というように、コミュニケーションの要素を再認識させることができる。

(イ)「リアクションの達人」(受容)

Great!/Really?等の言葉とともに、表情やジェスチャーを使って自分に合ったリアクションを示し、相手を受け入れる活動である。この活動の基となった「めげせ!リアクションの達人!!」(河村・品田・藤村 2007b pp. 106-107)は、気持ちの程度に応じたリアクションを表情・声・ジェスチャーなどで表現するものである。言葉とともに、表情・ジェスチャーでも自分の気持ちを伝えることは、相手を受け入れていることを表すコミュニケーションの大切な要素である。

(オ)「みんなで言ってみよう」(支持)

場面に合った声のトーンを意識しながら、他者を褒め励ます言葉やお礼の言葉等を、絵カードに合わせてリズム良く声に出す活動とした。適切な言葉を適切な場面で他者に声掛けできるようになる、「めげせ!マナー名人!!」(河村・品田・藤村 2007a pp. 98-103)を基にした。親切にされた時のThank you. や仲間の成功にはGreat!等、コミュニケーションの定型ともいえる言葉を適切な場面で用いることは、気持ちを伝えるために欠かせない要素であり、コミュニケーションを促すきっかけにもなると捉えた。

(カ)「ほめ上手、ほめられ上手」(支持)

ジェスチャー等を含めたリアクションでタイミング良くグループの仲間を褒め励ます活動である。3・4時間目において、できることを伝え合う場面で取り入れた。褒める場面を具体的に意識できること、褒めるという行為への抵抗を減らすとともに、人を褒めることは自分にとっても意味があるという体験ができる、「ほめ上手ほめられ上手」(河村・品田・藤村 2007b pp. 128-129)を基にした。人は褒め励まされると、認められていると感じ嬉しくなる。仲間同士で認め合うことは、友人関係を広げ、深めることにつながる。小学校高学年という発達段階において、恥ずかしさからふだんは言うことをちゅうちょする「すごいね!」「惜しい!」等も、Great!やAlmost!と言葉が外国語に変わることによって言えてしまう児童は多い。

(キ)「区別しないでグループ活動」(愛他性)

「集まったらまずあいさつ」(河村・品田・藤村 2007a pp. 128-129)を基にし、グループ作りの直後に仲良くなるコツは挨拶にあることを知り、集まったらまず挨拶をするとグループが一つになる体験ができるという

良さを取り入れた。様々な円陣の様子を例にアイディアを出し合い、グループの仲間全員で一つの挨拶をする活動とした。外国語で行うと、Group four!と英語で仲間全員がグループ番号を言うだけでも爽快で、その後も気持ち良く仲間と関わることができる。

(ク)「番組を作ろう」(支持)(愛他性)

役割演技を取り入れて、グループの仲間のできることを紹介する番組作りを行う活動である。演じ合うことにより、感情の共有を図り、人間関係を深めることをねらいとする「『ミニ劇会』を開こう!」(相馬 2006 pp. 56-58)を基にした。導入ではALTと担任の出演する番組を見せ、活動のイメージをもたせた後、特技を発表する児童のほかに司会役、褒め励まし役の児童等、役割を決めた。番組で役割を演じることが協力し助け合うことになり、その結果、人間関係が深まることをねらいとする。例えば、司会役の児童は番組の流れをつくること、褒め励まし役はタイミングよくリアクションすることでグループの仲間へ貢献し、人と協力する喜びを実感する。番組発表会では、観客全員が褒め励ますリアクションをすることで、発表者や発表グループの仲間はクラスの仲間からの支持を実感できる。

ウ グループ構成の工夫

1・2時間目に行ったインタビュー活動では、隣席の相手と行うことから始め、ふだん話をする親しい友達を経て、最後はクラスの仲間と行うというように、関わりが段々と広がるようにした。3時間目の、今できることを伝え合う活動では、お手玉グループかけん玉グループのどちらかを自分で選択できるようにした。4時間目の番組作りは慣れない活動のため、日頃給食等を共にしている生活グループで活動させるなど、活動場面の設定とグループ・アプローチの活動のねらいを考慮した上で、グループを構成した。

エ「友だちかかわりマップ」の開発

児童の関わりの様子やそれに対する満足度の全てを把握し、人と関わる意欲が児童に育まれている状況を見取することは難しい。そこで、これらを把握し、見取る手立てとして、毎授業の終わりに記入させるワークシート「友だちかかわりマップ」を開発した(第1図)。

第1図 友だちかかわりマップ

開発に当たり、児童がマップを見返した際に、多くの人との関わりを、視覚的に振り返ることができるよう、以下の三点について工夫した。

一点目は、誰とどのように関わり、何を思ったかを書く枠を設けたことである。関わった際の自分や相手のリアクション

については記号から選び、○で囲んで表すこととした。二点目は、自分の関わった人が時間毎に増え広がる様子を目に見えるようにした点である。自分の枠を中心に据え、その周りに関わった人の名を順に書かせるようにした。何時間目に誰とどのように関わったかが分かるように、一時間目から黒、赤、青、緑の順に色分けして書かせた。

例えば、第2図のように児童が記入したとすると、「2時間目のインタビュー活動において、Aさんは卓球と料理ができるということを知って、Great!とリアクションした」「4時間目の番組作り活動において、Bさんの新体操している姿を見て、彼女を褒めた」ということを表している。

三点目は、「今日の友だちかかわり温度」として、授業毎に他者と自身との関わり合い及びそれに対する満足度を色で塗り、関わり合いの様子を記述する項目をシートの右端に設けたことである。赤へ向かうほど、自分と人との関わり合いが高いことを示す(第3図)。

(Aさん)	()
卓球・料理 ← 赤字	!
!	!
(Bさん)	()
新体操 ← 緑字	!
!	!

第2図 記入例

友だちかかわりマップ	
2時間目	今日の友だちかかわり温度は?
80°C~100°C	赤
60°C~79°C	橙
40°C~59°C	黄
39°C以下	青
	前の時より、いろんな人と話せた。楽しかった!

第3図 児童の「友だちかかわりマップ」

これらの工夫によって、このマップは児童と教師に次のように役立つ。児童にとっては、視覚化された自分と他者との関わり合いの様子を振り返ることで、人と関わる良さを実感するきっかけとなる。教師にとっては、児童の関わり合いの様子、それに対する満足度を把握することができ、次の指導にいかす資料となることである。

(3) 単元指導計画

第4図に、英語ノート2のLesson④にグループ・アプローチの活動を取り入れた指導計画を示す。活動の

内容及び児童の活動への取り組みやすさを考慮し、活動のもつ効果的要因が、受容、支持、愛他性の順になるように単元に取り入れることとした。1・2時間目は、他者を受け入れる活動を主に取り上げ、他者に受け入れられる良さを実感させる。3時間目には、他者を褒め励ます活動を行い、他者に褒め励まされる良さを実感させ、4時間目にはこれまでの学習をいかしながら、主に他者と協力し他者を助ける活動を行う。

Lesson④でできることを紹介しよう	
1時間目	ファーストネームゲーム 受容 Let's listen1 p.56 Activity1-①② p.60, 61 「?」と「!」と「!」 Activity1-③ p.61 受容 友だちかかわりマップ
	2時間目
3時間目	みんなで言ってみよう 支持 復習 Activity1-①等 p.60 ほめ上手、ほめられ上手 お手玉・けん玉を練習し 今できることを伝えよう 支持 友だちかかわりマップ
	4時間目

下線部は「英語ノート2 指導資料」のページを表す

第4図 Lesson④ 単元指導計画

(4) 授業の振り返り

「友だちかかわりマップ」を各時間の最後に記入させ、授業の振り返りとした。2時間目は、授業を終える挨拶の前にマップを見せて、まだ関わりをもていない人にも着目させ、「さよなら挨拶大作戦」(受容) (「あいさつバージョンアップ大作戦」(河村・品田・藤村 2007a pp. 88-89) を基にした活動) において、「次の外国語の時間は、是非、関わろうね」という気持ちを込めてGood-bye. の挨拶をさせ、次時へ向けて一人でも多くの人と関わることを意識させた。

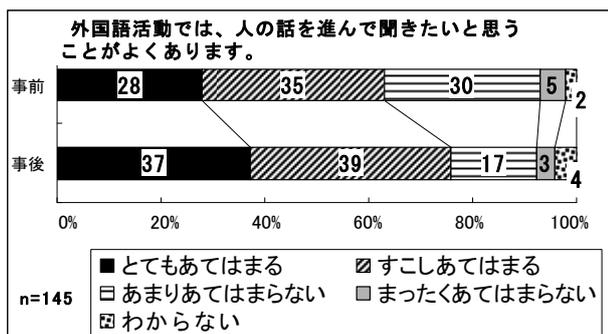
「多くの人を知ることができて良かった」等の人と関わる良さを実感したことや、「自分から積極的にリアクションをした」等の人と関わる意欲をもてたことを記述し、「今日の温度は赤!」と嬉しそうに「かかわり温度」の色を塗る児童の様子が見られた。

3 検証結果と考察

(1) 事前・事後調査の比較から

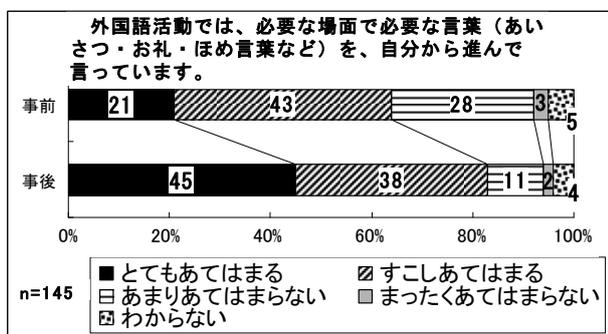
「人と関わること」に関する児童の意欲の変容を見取るため、検証授業の前後に共通の設定でアンケート

調査を行った。目指す児童像に即して結果を示す。



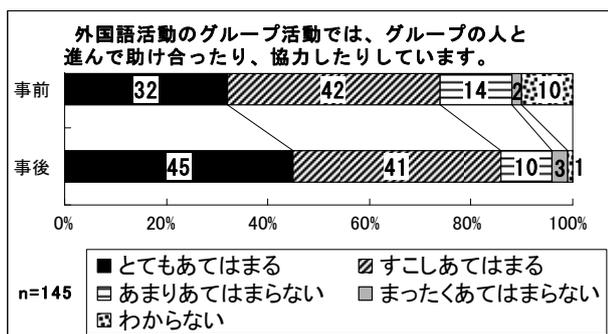
第5図 事前・事後アンケート結果①

「①人の話を進んで聞きたい」について、「外国語活動では、人の話を進んで聞きたいと思うことがよくあります」という調査項目では、「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」と肯定的に答えた児童が13ポイント増加した（第5図）。



第6図 事前・事後アンケート結果②

「②人を褒め励ましたい」について、「外国語活動では、必要な場面で必要な言葉（あいさつ・お礼・ほめ言葉など）を、自分から進んで言っています」という調査項目では、「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」と肯定的に答えた児童が、19ポイント増加した（第6図）。



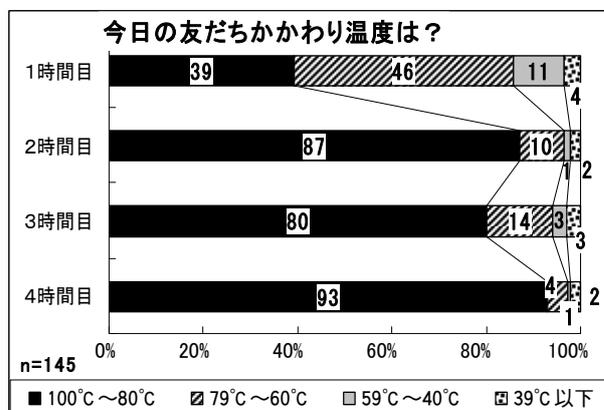
第7図 事前・事後アンケート結果③

「③人と協力し人を助けたい」について、「外国語活動のグループ活動では、グループの人と進んで助け合ったり、協力したりしています」という調査項目では、「とてもあてはまる」「すこしあてはまる」と肯定的に答えた児童は、12ポイント増加した（第7図）。

(2) 「友だちかかわりマップ」から

第8図は、児童の「今日の友だちかかわり温度」の推移を示したものである。関わりの度合いが60℃以上

を示す児童を、自身の関わりに対して肯定的であると捉えると、全体的に児童の満足度は高かったと言える。一方、1時間目に80℃以上を示す児童の割合が他と比べて低いのは、「積極的にコミュニケーションを図るとは多くの人とやり取りすること」であると認識していたためであることが感想の記述から読み取れる。1時間目は「隣席の人にインタビュー」という活動であったため、やり取りした人数が少なく、「かかわり温度」も低かった。しかし、2時間目にはインタビュー相手をクラスの仲間に広げた結果、やり取りした人数が増え、80℃以上を表示した児童が増えた。3時間目以降も高い満足度を示す児童が多い理由として、児童の認識が変化したことが挙げられる。褒め励ます活動を行ったことによって、人数のみならず、自分がどのようにやり取りすることができたかという点にも着目するようになったという内容の記述が多く見られた。



第8図 「友だちかかわり温度」の推移

(3) 児童の感想から

全授業後に、児童が書いた感想には、人と関わる良さの実感に関するもの、人と関わる意欲をもつことに関するものが多く見られた。以下にその一部を示す。

- ・色々な人の得意なことを知ることができて、もっと仲良くなれた気がする。
- ・はずかしがりやの私がたくさんの人と話せるようになりました。
- ・これからもどんどん人と関わっていききたい。
- ・外国語の授業で勉強したことをふだんからやってみようと思いました。

(4) 考察

事前・事後調査の比較からは、目指した児童像に関して良い変容が見られ、人と関わる意欲が育まれたことが確認できた。「友だちかかわりマップ」及び児童の感想からも、人に関する新たな情報を得ることや関わり方の広がりを喜ぶ等、人と関わることの良さを実感でき、人と関わる意欲をもてた様子がうかがえる。

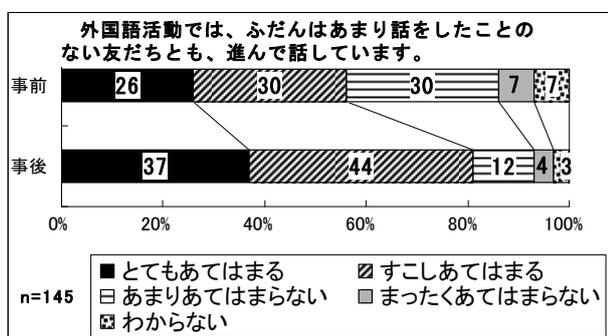
以上から、児童の関心を高める活動場面を設定し、コミュニケーションの楽しさを体験させ、三つの効果的要因をもつグループ・アプローチの活動を取り入れた外国語活動の指導は、児童の人と関わる意欲を育む

ことに対し、有効であることが明らかになった。

4 今後の課題

児童の感想に、「慣れるまでは、アイコンタクトを取るのが大変だった」という記述が見られた。アイコンタクトを取ることに慣れるとその後の活動が活発に行われることから、今後の課題として、活動を取り入れる時期を考慮することが挙げられる。本研究においては、検証授業のほとんどを10月に行ったが、例えば、「スマイル・アイコンタクト・握手リレー」については、学級編成直後の早い時期から取り入れると、より効果的であると推測する。

もう一つの課題は、年間指導の中にグループ・アプローチの活動をどのように組み合わせて取り入れていくかということである。



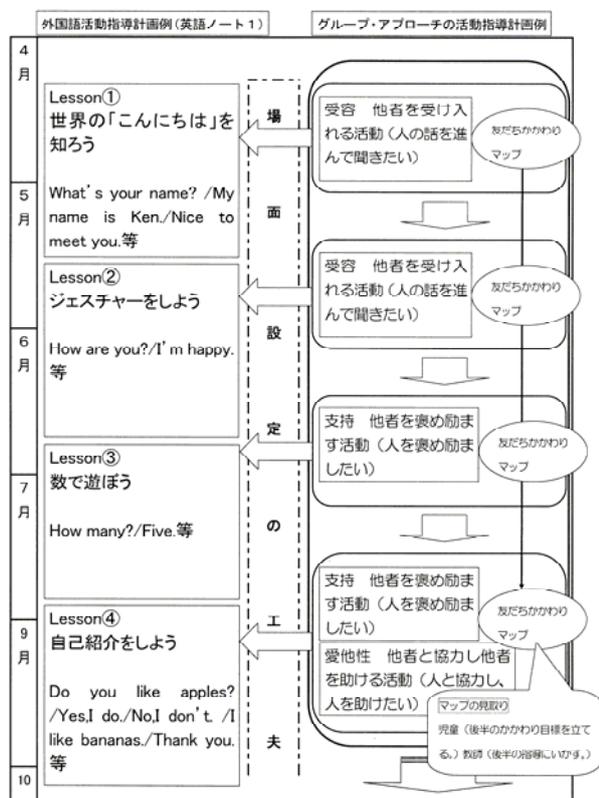
第9図 事前・事後アンケート結果④

検証授業は各クラス4時間という短い時間ではあったものの、「外国語活動では、ふだんはあまり話したことのない友だちとも、進んで話しています」に対し、事後調査では、肯定的に答えた児童が25ポイント増加している（第9図）。

このことから、今後、年間を通じてグループ・アプローチの活動を取り入れた外国語活動の指導を行うならば、児童の人と関わる意欲を継続的に育むことができるのではないかと予想する。グループ・アプローチの活動を4月から9月（前期）に取り入れた指導計画の一例が第10図である。本指導計画例では、児童の活動に対する取り組みやすさを考慮し、受容、支持、愛他性の順に活動を組み合わせるものを1サイクルとし、年間2サイクルを英語ノート1に取り入れることとした。各サイクルの最後には「友だちかかわりマップ」による見取りを行い、次のサイクルにいかすことになっているが、本指導計画例については、これから実践を重ねる中でその有効性を検証する必要がある。

おわりに

本研究では、人と関わる意欲を育むことに成果を得ることができた。本研究を基に、新たなグループ・アプローチの活動を取り入れた授業実践を積み重ね、児童の人と関わる意欲を更に育むことを目指したい。



第10図 グループ・アプローチの活動を取り入れた前期指導計画の一例

引用文献

文部科学省 2008『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』 東洋館出版社 pp. 8-9
 NPO星槎教育研究所 2009『クラスで育てるソーシャルスキル』 日本標準 p. 160
 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫 2007a『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校低学年』 図書文化社
 河村茂雄・品田笑子・藤村一夫 2007b『いま子どもたちに育てたい学級ソーシャルスキル 小学校中学年』 図書文化社
 國分康孝 2005『エンカウンターで学級が変わるショートエクササイズ集』 図書文化社
 相馬誠一 2006『学級の間人間関係を育てるグループ・アプローチ』 学事出版
 野島一彦 1999「グループ・アプローチへの招待」(野島一彦『現代のエスプリNo. 385 グループ・アプローチ』 至文堂)

参考文献

文部科学省 2009『英語ノート1 指導資料』
 文部科学省 2009『英語ノート2 指導資料』